

五、信心歡喜

大無量寿経は、教主世尊の説きたまひしものではある。しかしながら教主の背後には言説を超えたる久遠の本仏ましまして、教主の言々句々を聞き、その言々句々を通して、自ら名告りたまうが故に、その言々句々は、昼夜一劫を経とも、名号を体とし、本願を宗要とせざるはないのである。言々句々、名号より出でたるが故に、それを開く者をして本願名号に相應する信心を内に成就せしめるのである。これ本願成就の文に「聞其名号、信心歡喜」と言われる所以である。されば、信心歡喜は、唯、其の名号を聞くことによつてのみ生れるのである。

しかるに、聞くと言うことは、飽くまで、教主善知識によりつつも、それによつて成就したる信心はすでに行者独立歩の天地であつて、何ものを以ても奪うこと能わざる、行者に於いて自然法爾なる世界である。教えによつて開けたる信心なりとて、教説を聞く度に動揺し、ぐらつくものは、決して眞実信心ではあり得ない。一度発起したる信心が、更に教えによつて深まることは、なされねばならない。しかし人を変え、処を変えて、聞く度毎に動くものは、未だ信心成就せず、教主を眞に教主とせぬものである。これ自力疑心の致す所である。若存若亡を嫌われ、声聞の貶される所以である。

教主は必ず行者をして、行者自体独立して本願の名号に生きぬくことを求めたまひ、必ずかくならしめたもうのである。親鸞聖人が特に往生之業念仏為本の師教を領解して、信心正因称名報恩と生きたまひしも、その故である。信心は金剛の真心であつて、常住不変にして何ものによつても破壊すること能わざるものである。聖人が好んで「金剛不壞の真心」なる文字を用いたもうも、それが為である。教主の教えによつて成就するが故に、縁覚の独断にあらず。金剛不壞にして、それ自体独立するが故に、声聞に非ず。信心こそはまことに救いの全き相そのものである。

信と順

しかるに我等は、既に本願文の解釈において、具に「至心、信樂、欲生」の三心が、眞実信心の一心なることを領解した。本願文の「信樂」とは、成就文の「信心」である。成就文においては「聞其名号、信心歡喜」と、信心が如何にして衆生の上に発起せしめられるかの方法を示したまひ、本願文においては、信心の本質を示して、眞実信心は衆生の自力煩惱によつて開発せず、直ちに本願力の回向成就したまうものなることを示されたものである。

まことに、聞其名号のままに、衆生心中に開ける信心の白道は、如来本願力によつて成就せるものである。如来本願そのままの顕現である。如来の本願は、外に加えられる力ではなくて、衆生の貪瞋煩惱中に発起する生命内奥の事実である。内へ内へと、内に開く眼である。かるが故に、信心は人格の本質として、独立不拔の領域を成就するのである。

重ねて言う、聞其名号信心歡喜の世界は、教主善知識と我との世界における交渉であり、至心信樂の世界は、本仏弥陀の本願海の事実である。前者は徹頭徹尾人に依らずば成就せず、後者は徹頭徹尾、人を超えて独立せる世界である。しかしてその信心は信樂なるが故に、二者完全に一である。されば、如来超世の本願を忘れたる信心は自力の疑心であり、成就文の世界を無視したる信は独断である。成就文の世界は教主への帰依の相であり、第十八願の世界は本仏弥陀への帰命の相である。二者相即一致の世界こそ、眞実信の世界である。

教主は行者の信境をして、本仏久遠の本願に相應せしめんが為に教えを説くのであり、行者は自己の信をして、本願眞実そのままなる如実の信たらしめんが為に、合掌恭敬して教えを聞くのである。されば、教主は決して行者をして、自力疑心、自力建立の信の世界に停る

ことを許さない。直ちに久遠の本願に一致せしめて、教主自身と同一自証に住せしめ、教主を超えしめんことを願求するのである。もし、善知識にして、人を自己の教権のもとに繋ぎ、あるいは、不如実のままに行者を許して本仏の真意を誤らせるならば、善知識でなくて悪知識と言ふべきである。

我等はまことに、彼岸と此岸とに立ちたまう二尊の教勅に信順して、この不可思議なる信心海に入り得るのである。本願文は彼岸の本仏の聖意であり、成就文は此岸の教主の思し召しである。

歡喜

我等は、成就文の世界に於いて信心歡喜の文字を発見する。人間の歡喜必ずしも信心ではないが、信心は必ず歡喜である。

憶うに信心は、我等が発起する心的事実のうち、最も深くして清淨真実なるものである。その本質をつけば、直ちに如来久遠の仏性であり、無漏清淨なる涅槃の血液である。されば信心は、空疎なる「信じてさえいればいい」というが如き、平面浅薄なるものに非ず、無味乾燥、死灰の事実²に非ずして、無底の深淵であり、生命の躍動であり、血潮の奔流であり、歡喜の獲得である。歡喜踊躍は如来の光に救われたる者の当然の相である。

我と同心一体なる教主、慈父に値い得たること、既に何ものにも替え難き喜びではないか。真実の教えに会いたること、すでに深甚なる慶びではないか。教主世尊に値いたることだけにて、人生の一切の見方は変わる。荷物にすべからざるを荷物とし、苦しむべからざるを苦しみとし、歩まざるべからざるを歩まざりし、過去の一切を打ちのめされて、ここに、我等が難治の病患の根本を握って、甘露の妙薬を与えたもう教主の前に、歡喜がなくてどこにか歡喜があるう。憶うに、如来超世の本願も本願成就文の世界に於いて、初めて人生に具体的となるのである。歡喜の文字が、本願成就の文に示される所以であろう。私は今少し歡喜の文字を凝視したいと思う。

信樂と信心歡喜

私は先に、「憶うに信心は、我等が心的事実のうち、最も深くして清淨真実なるものである。その本質をつけば、直ちに如来久遠の仏性であり、無漏清淨なる涅槃の血液である。されば信心は、空疎なる信じてさえいればいいというが如き、平面浅薄なるものに非ず、無味乾燥、死灰の事実²に非ずして、無底の深淵であり、生命の躍動であり、血潮の奔流であり、歡喜の獲得である。歡喜踊躍は如来の光に救われたる者の当然の相である。」と言った。これ全く、信心がそのまま歡喜である所の、人生に具体的なる大信海を表現せんとするが為の文字であった。

我等は、まことに本願文に於いては「設我得仏、十方衆生」との願、「若不生者、不取正覺」との誓い、あくまで底なき無明生死の黒闇に大悲同感して、御身自身の運命を流転の衆生と同一に觀じたまう法蔵菩薩の弘誓願にふれた。我等はそこに悲痛なるみ親を発見する。暗へ闇へと神通応化して、その地獄の火炎裏に、仏と成らんと願じ、若不生者と感じたもう大悲のみ親を発見せしめられた。まことに十八願に於ける如来は大悲そのものであつて、その悲痛胸にせまつて、人間の一切の喜悅をして、消滅せしめたまうが如くである。

しかるにその誓願は、至心、信樂、欲生我国の三信となつて表現せられた。至心は名号それ自身の体のあくまで清淨真実なるを現したまい、欲生とは、如来救済意志の表現であり、信樂こそは、衆生貪瞋煩惱中に発起する仏凡一如一体の覺知、金剛不壞の信心そのもので

あつた。この信樂こそは、聖人をして「歡喜賀慶の心」と言わしめたるものである。これひとえに、信樂の樂の文字の内容でなくてはならない。しかれども、本願文にあつては信樂はあくまで如来誓願の内容であり、如来胸中の真実である。

しかるに、本願成就文の世界において、我等は明確に「信心歡喜」の文字にふれる。これ本願文の信樂が、衆生の心的事実として顕現曝露せるものに外ならない。然り、本願の信樂はその成就の世界に於いては、信心歡喜となつて、人生に具体的となるのである。事実以上の事実となるのである。されば、信樂はそのまま信心歡喜である。

歡喜光仏

無量寿仏の光明を讚嘆せらるるに当たつて、『大無量寿經』には、十二光仏を以てせられ、その第七に歡喜光仏と出された。しかして、清淨光、歡喜光、智慧光の三光を、次第の如く、貪欲、瞋恚、愚痴の三毒を対治するものと解せられて来た。

憶うに、貪欲はしばしばその満たされるや、人生に歡喜の凱歌を挙げる。しかるに貪欲が、如来の清淨光によつて否定せられ、対治せられなくてはならぬものである限り、その貪欲より誕生する喜悅も亦、虚妄なるもの、喜ぶべからざるものとして否定されなければならぬものである。瞋恚は貪欲の満たされざる相である。貪欲による歡喜あるが故に、貪欲によつて瞋恚又は愚痴があるのである。貪欲の歡喜が否定されなければならぬ限り、貪欲の悲しみ、恨み、怒りも亦、否定し対治されなければならぬ。清淨光、歡喜光、智慧光が、彼岸の如来に属し、如来の徳を現わせる如来の名号たる所以がそこにある。

されば、淨土の純粹なる歡喜光は、清淨光及び智慧光と共に、貪欲と愚痴とを対治しつつ、瞋恚の悪毒を対治して、彼岸の如来の胸中そのままの歡喜を人生に実現したものである。即ち、聞其名号信心歡喜の歡喜は、三毒に根ざさざる歡喜である。かくて信心の世界に於いては、彼岸の事実が人生の内容となりたものである。信心歡喜とは真に喜ぶべきを喜ぶ心でなくてはならない。

教主と歡喜

我等は教主世尊を以て絶対的人格となし、これに帰依し恭敬する。まことに我等が稽首作礼して教主として尊崇し恭敬するは、世尊が、特に本仏の本願に乗托して人生に興出し、本願と名号とを説きたもうが故である。世尊は今現に、諸根悅豫し、姿色清淨に、光顔巍々として、往相の代表者尊者阿難の前に立ち、五徳の瑞相を示して、その大寂定、仏々相念の境を現したもうは何故であるか。これ全く身を以て、本仏弥陀の威神を示し、特に本願の名号を説きたまわんが為ではないか。

見よ。本願成就の文に於いては、直ちに聞其名号信心歡喜と、衆生に対して其の名号を聞信すべきことを求めたもうた。名号とは因位法藏の本願の成就せる相であるが故に、世尊は、特に成就せる名号と、その名号に内在する因位の本願とを説きたまわんとせられるのである。悲痛なる如来久遠の大悲は成就せられたのである。世尊こそは、特に如来因位の大悲本願の成就せられたることを衆生に向つて説くを以て、その興世の使命とせられ、身を以て名号成就を告げたまうのではないか。

噫。本弘誓は成就せられた。永遠常住の光はすでに成就せられた。永遠の最勝道は成就した。久遠の大理想は円成せられた。

無量寿よ。無量光よ。十方恒沙の諸仏の讚嘆と共に、如来の名号は成就せられた。法界は成就せられたる如来の功德によつて莊嚴せられる。衆生は、己が小善根に立て籠り、小我的

努力によつて功德を成就せんとする自力を捨てて、直ちに成就されたる功德宝海に帰入すべきである。

世尊こそは、かくの如く尊くも真実なるものの一切が、今現に、成就せられたることを我等が前に身を以て示現し、真実教を通してこれを我等衆生に恵まんとせられるのである。大經に言く、

「如来無蓋の大悲を以て三界を矜哀す。世に出興する所以は、道教を光闡し、群萌を拯い恵むに真実の利を以てせんと欲してなり」と。

衆生は一切の功利的欲念を超えて、満足円融広大なる全一の聖業に帰すべきである。

噫。世尊の胸中に燃ゆる聖なる大燈明を如何なる暴風が消し得るものぞ。世尊の無量の寿を何者か奪い得るものぞ。世尊の住したもう最勝道を何ものか破壊し得るものぞ。世尊の自証したまう奇特の法は何ものかこれに比すべきものがあるう。しかしてかかる世尊の一切は、弥陀三昧の徳として不滅の歡喜に住したまうのではないか。

実に世尊こそは、世の老病死を痛み、一切の榮華富貴を捨てて、よく無一物に至り、ついに不滅の証に入りたまひ、それを通して真実の光、真実の喜びの何ものなるかを、身を以て示したもうたのである。我等はかゝる絶対人格と一体なる名号を、その人格よりなされる説法を通して領解するが故に、よく聞其名号、信心歡喜するのである。仏説無量寿經とは、無量寿の名号が仏をして説かしたる不滅の經と言うことである。歡喜光仏が、世尊の金口を通して名告り出でたるものである。

道と歡喜

世尊に発したる生命の巨流は、一河の流れとして人を求め、龍樹、天親、曇鸞、道綽、善導、源信、法然、親鸞と、時代と共にゆくゆく大聖を誕生せしめた。それらの菩薩大士は、皆悉く4不滅の人格として、虚偽のみ滋き暗の世の光として、道の権化として、永遠の聖座に輝きたもうてある。皆これ聞其名号信心歡喜の世界に於いて、凡俗の体解せざる歡喜を体解された方ではないか。

道の体解者は必ず苦悩を解脱超越して永遠の歡喜地に至れる人である。道は必ず歡喜である。

「爰に愚禿積の親鸞、慶ばしき哉や、西蕃月氏の聖典、東夏目域の師釈に遇ひ難くして今遇うことを得たり、聞き難くして己に聞くことを得たり。真宗の教行証を敬信して、特に如来の恩徳の深きことを知んぬ。斯を以て聞く所を慶び、獲る所を嘆ずるなり矣。」
と言ひ、又

「慶しき哉。心を弘誓之仏地に樹て、念を難思之法界に流す。深く如来の矜哀を知りて、良に師教の恩厚を仰ぐ。慶喜彌至り、至孝彌重し。」
と嘆ぜられるもの、独り親鸞聖人のみではあるまい。

実に大無量寿經の宗教こそは、人間の不純分の一切を廃捨したる、清淨真実なる信心海そのものを開顯せられたるものである。純粹道義の世界である。南無阿彌陀仏の不行のみ、永遠の真実であり、誓願一仏乗のみ、永劫の光たることを示されたものである。そこには人間の功利的不純分の微塵も入ることを許されざる、白道そのもの、本願一実の大道そのものの尊高を示されたものである。

聞其名号、信心歡喜とは、実に名号そのものを完全に純粹に領受することによつて、衆生界に純粹道義の成就することを示されたのである。信心歡喜とは、大道に自然に生かされる

唯一絶対の信境である。道は必ず歡喜と共にある。そこに如何なる人間の苦惱おしよせるともついに亡ぶことなき歡喜である。

「歡喜は、得べきことを得てんと、先だちて、かねてよろこぶ心なり。……慶は、得べきことをえて、後に喜ぶ意なり。」（一念多念証文）